

日高町史

下卷



日高町役場新庁舎(昭和56年)



日高町農村環境改善センター(昭和53年)

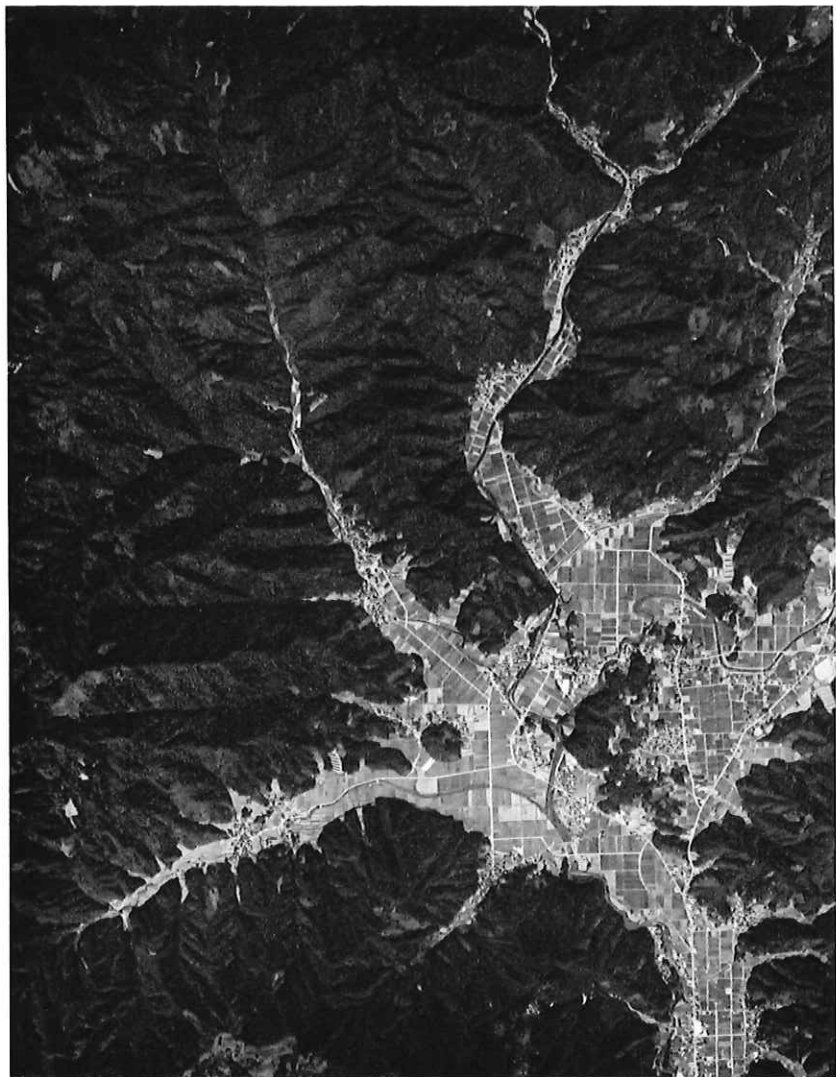


日高町の街なみ(中心街と国府平野) [神戸新聞出版センター提供]

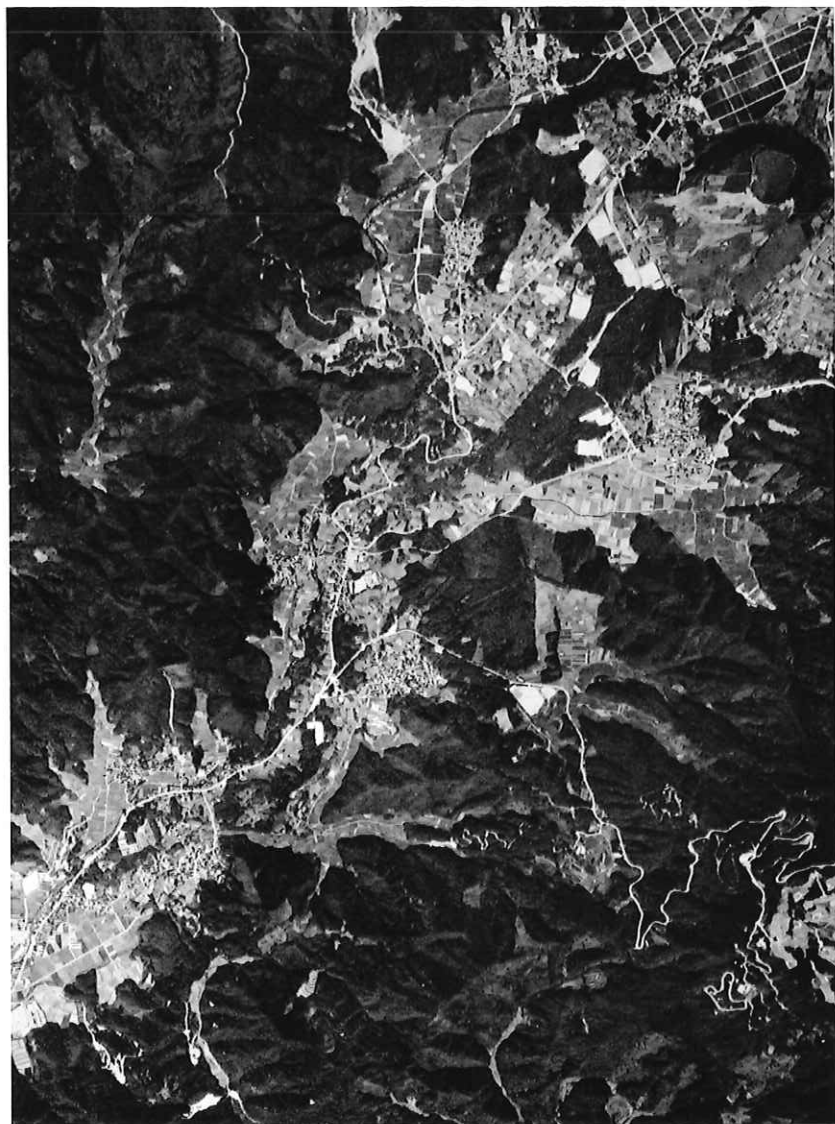




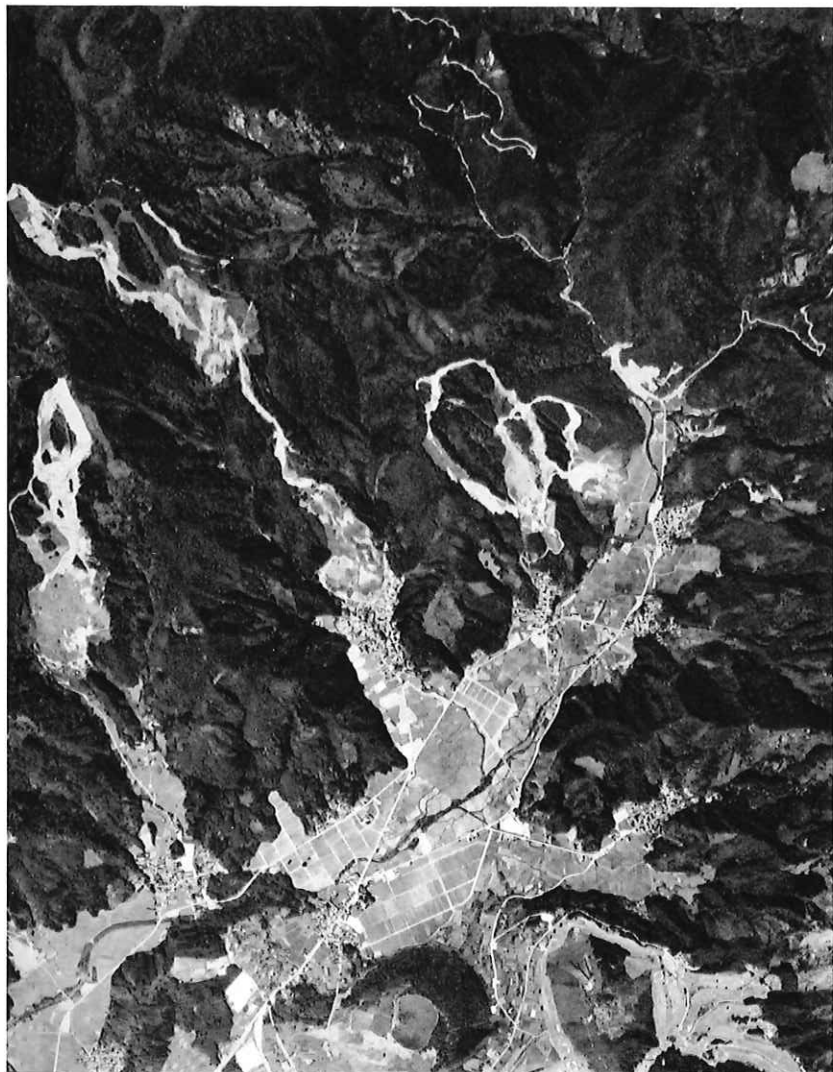
日高・国府・八代地区(昭和57年)
〔株大阪写真測量所撮影〕



三方地区(昭和57年)



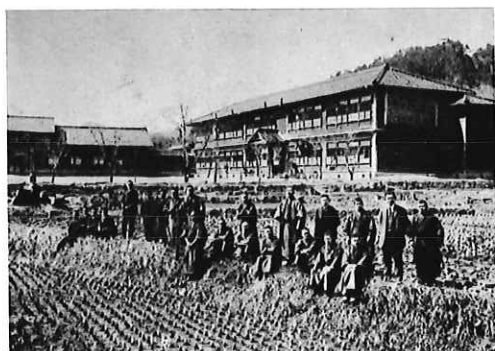
清滝地区(昭和57年)



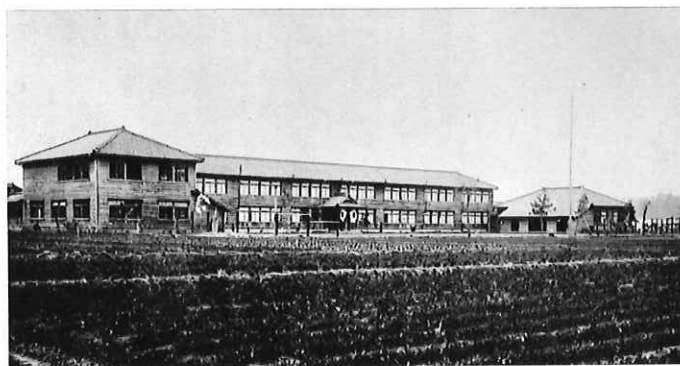
西気地区(昭和57年)



府中小学校 (明治35年)



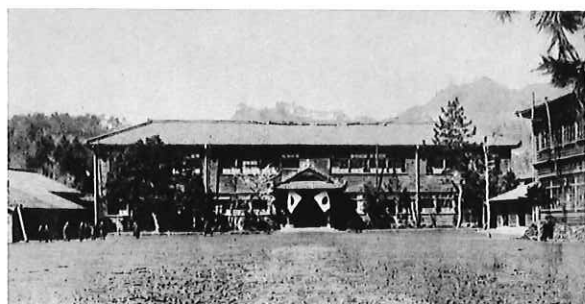
八代小学校 (大正10年)



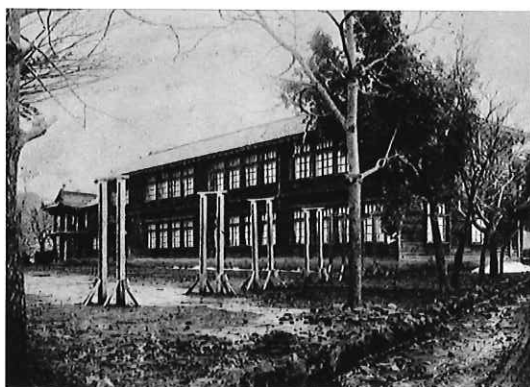
日高小学校 (明治43年)



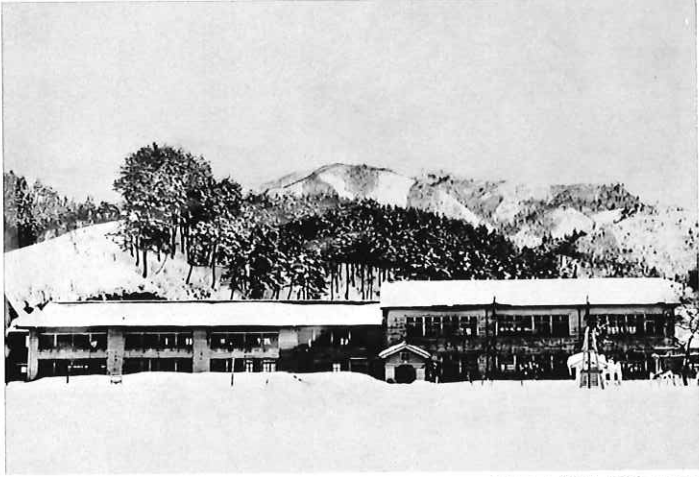
静修小学校(昭和4年)



三方小学校(明治31年)



清滝小学校(大正9年)



西気小学校(昭和10年)



日高東中学校校舎(昭和43年)



日高西中学校校舎(昭和42年)



日高高等学校校舎(昭和56年)



江原本町街頭風景 (大正初期)



江原郵便局竣工式 (明治39年)



日高町・三方村・宿南村衛生組合病院全景
(昭和5年)



江原駅前風景 (昭和初期)



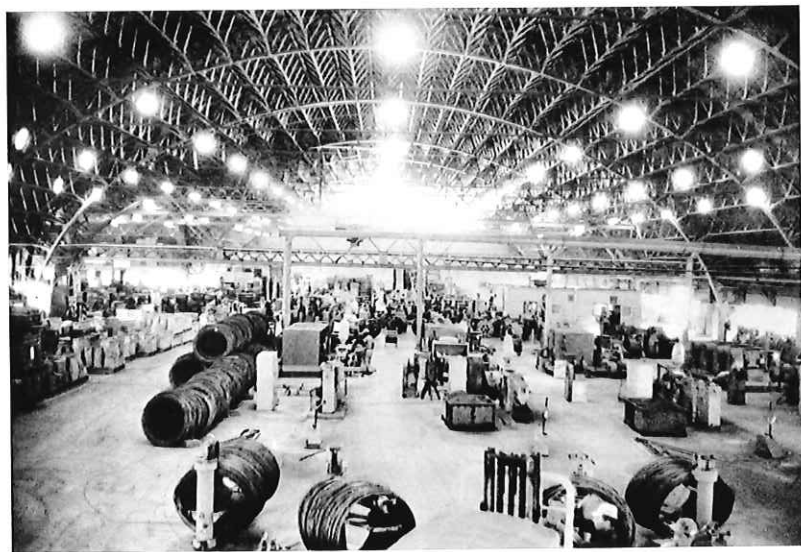
神戸地方法務局日高出張所全景 (昭和15年)



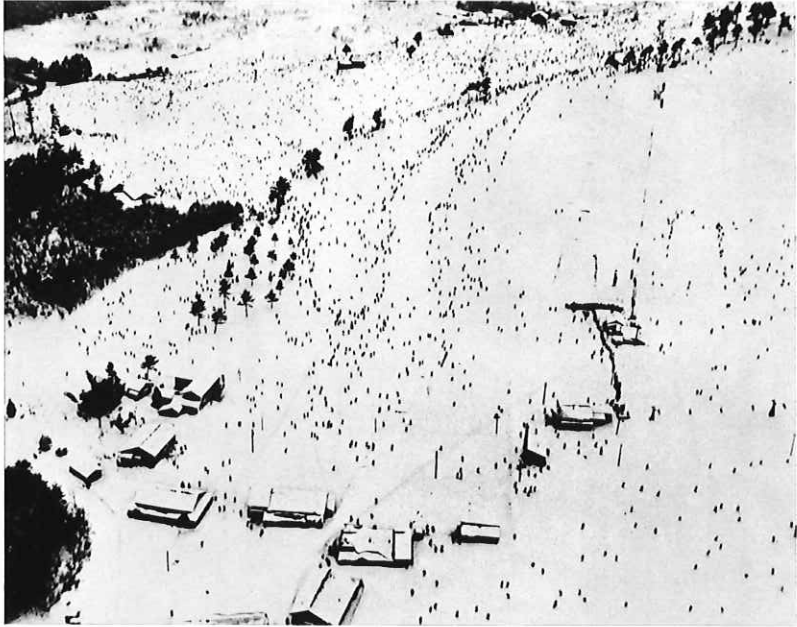
三方農業協同組合全景 (昭和30年頃)



全盛期の郡是製糸江原工場全景
(大正期)



神戸製鋼所日高工場内部



スキーヤーで賑わう神鍋スキー場 (昭和31年)
〔朝日新聞大阪本社提供〕



神鍋シャンツェ (岩倉)
(昭和6年)



円山川鮎釣り風景 (土居附近) (昭和33年)



二代町長 太田了二



初代町長 森垣利助



四代町長 長沢 昂



三代町長 森垣 壮



旧日高町役場庁舎全景

序

昭和五十一年七月の日高町史上巻、昭和五十五年三月の日高町史資料編に続き、ここに日高町史下巻の発刊を迎え、新町誕生以来の宿題であった町史編さんが完結することとなりました。

通史上下巻と資料編より成る日高町史三巻は、質、量ともに類を見ない充実したものと喜びに堪えません。

思い起こしますと、昭和四十六年九月教育委員会主管のもとに町史発刊を志して以来、実に二十カ年の歳月を要しました。この間、本書上巻執筆者石田松蔵先生、小西知巳先生のご逝去の悲しみに遭遇しましたが、ここに無事完結いたしましたのも本書上巻以来の執筆者梅谷光信先生の献身的なご尽力と、町史編集委員長田中隆一氏を中心とする委員諸氏のご努力の賜と深く感謝するものであります。

日高町は古くから北兵庫の中心地として栄えた由緒ある地であり、豊かな歴史と伝統に包まれています。この格調高い「日高町史」を、多くのみなさまが祖先の偉大な足跡と日高町の意義深い歴史に思いを馳せながらご愛読いただきますよう切望してやみません。

終りに、本書編さんにあたり、ご指導並びに貴重な資料のご提供等数々のご協力をいただいた各位に対し重ねて厚くお礼申し上げます。

昭和五十八年一月

日高町長

長塚 昂

下巻の序によせて

去る昭和四十六年に日高町史の発刊が企画されてから、早くも十二年が過ぎ去った。故石田松藏氏が古代・中世を、私が近世を、それぞれ分担して編集・執筆した町史上巻の出版以来を数えても、既に六年余の歳月が流れている。今ここに下巻の出版に際して、編史の道の厳しさ、難かしさを、あらためて痛感せずにはいられない。

日高町史は旧気多郡史に相当し、八〇近くの旧村大字を包含する一大町史である。本下巻の眼目は、明治維新に幕を明けた日本の近代国家としての発展の過程の中で、但馬史の流れの中心に位置づけられる日高町の今日までの歩みを跡づけ、その中で祖先たちが果たした多様多様な歴史的役割を説明することにあつた。

いかにわが日高町が幕藩体制下の封建的農村社会から脱皮して、政治的・経済的・社会的・文化的に近代社会への発展を遂げてきたか。軍国主義下にいかに大きな犠牲を払わねばならなかったか。太平洋戦争の敗北を転換点として、その後でいかに時代が一変し、農村民主化が進んだか。町村合併により新しい日高町はいかなる課題と展望をもって歩みつつあるか。

本下巻においては、明治・大正・昭和の日本の近・現代史をつらぬく、代表的な地方農村社

会の姿を浮彫りにする試みの一つとして、また、但馬史の理解への一里塚として、この時代に生きて来た祖先達の歴史のいとなみに、諸先学の皆さんのお借りして照明を与えるべく努めたつもりであるが、筆をおくにあたり、まことに日暮れて途遠しの感を禁じ得ぬものがある。

本書の成るについては、まず森垣壯町長の決断、そして田中隆一委員長以下編集委員各位の熱意、わけても町史編集係・谷原好道・秋山忠治両氏の献身的活動が原動力となった。ここにこれらの方々や、歴代当局並に町民各位のご協力で深甚の敬意と感謝を捧げると共に、私の菲力のため筆の及ばざるところ多く、ご期待に充分応え得ず、本当に申訳なく思っている。

最後に重ねて私に与えられた皆様のご協力に深くお礼申し上げますと共に、日高町史上下巻及び資料編が今後の但馬史の研究のために役立てられることを心から期待し、更に忌憚のない御教示・ご叱正を賜わるようお願いしてやまない。

昭和五十八年一月

梅谷先信

日高町史によせる

待望久しかった日高町史は、このたびの町史下巻の刊行により、全三巻として見事に集録されることとなりました。

「ローマは一日にして成らず」といわれるように、わが日高町も先人の幾星霜の苦斗を経ながら、営々と築かれ花開いたものであります。

ここに二千有余年に及ぶ日高町の歴史が三冊の本に集約完結したことは、町民の永年の悲願であっただけに町政の歴史的快挙であり、その一字一句には、人々の深い哀愴がこめられており、この町史こそ厳しい但馬の自然と斗い、ひたすら平和を求めつつ動乱に身を投じ生死を重ねた庶民の生きた系譜であります。

激動する現代にあつて、いま静かに町史をひもときながら、誇り高いわが郷土と祖先の尊い偉業を偲んで対話を重ねるとき、新しい文化に満ちた日高町の未来が必ずや創造されるものと信じ、町民こぞって喜びをともにしたいものであります。

終りに、町史の完結を無事成し遂げられた梅谷光信先生ほか執筆者各位、強固な編集活動を展開された編集専門委員、ならびに寝食を忘れて没頭された事務局各位の多年のご労苦に深甚なる敬意と謝意を表します。

日高町会議長

泉

甲

町史完結にあたって

この度発刊される日高町史下巻の編集事業をもって、十二年に及ぶ宿願の日高町史（上、下、資料編）が完結できましたことは誠に喜びにたえません。

想えば、町史編集作業のスタートしたのはまさに高度成長時代の、昭和四十六年九月であり、諸資料の散逸の危機を感じさせて地方史編さんの声しきりに聞える時でした。

本町においては、幸いにかかわりの深い上に卓越せる歴史観並びに豊富な知識と経験を駆使され、小西知巳・石田松蔵・梅谷光信・太田順三・中野栄夫・櫃本誠一ほか諸先生の献身的な執筆の結晶である日高町史三巻の発刊となり、まさに天の恵みと人の和で完成した、大事業であったといえます。

現代編下巻は梅谷光信先生の執筆によるもので、本務と公務のかたわら永年にわたる真しな研究により山積する諸資料の選択と歴史観により編集、百年にわたる近代社会への歩みを親しみ易く平易に記述され、現代史として格調高い町史にまとめていただきました、深く敬意と感謝を捧げたいと存じます。

終りに町史完結を夢見ながら急逝された、石田松蔵、小西知巳両先生の在りし日の執筆の姿を想い起し深い感銘を憶えつつご冥福をお祈りいたしますとともに、田中隆一委員長を始めとする編集専門委員、谷原好道編集主任ほか事務局の関係者には、無事重責を果していただき誠にありがとうございます。なお、資料提供下さいました皆様に心からお礼申しあげて日高町史三巻の発刊完成の喜びといたします。

日高町教育委員長

赤松衛

凡 例

- 一、日高町史は、上巻（幕末まで）・下巻（明治以降）・資料編（考古之部・中世文書之部・但馬国太田文外）の三巻から成り、この巻はその下巻で明治前期・後期・大正期・昭和前期・後期・資料の六部から成る。
- 一、本文の記述は、原則として当用漢字・現代かなづかいを用いたが、歴史的用語・人名・地名などはこれによらなかった。
- 一、数字表記は、原則として千百五十三は一一五三とし、万以上には五万二〇〇〇という表し方をとり、年月日は昭和五十八年一月十五日のようにした。
- 一、引用した史料・文献名については、なるべく「」内に入れて表示した。
- 一、日本の年号の下に（ ）をつけ西歴を付したが、同一節内や特に昭和後期（敗戦後）の度重なる年号にはこれを省略した。
- 一、写真・表・図については、それぞれに一連番号を付した。更に巻末に写真・表・図一覧を作成したが、提供者、所蔵者名については、紙面の都合で相当数につき本文中には掲載をさけて巻末一覧に表示するにとどめた。
- 一、事象を明確にするため、出来る限り多くの方々の氏名掲載につとめたが、原則とし

て敬称を省略した。

一、年表は、「日高町史上巻」「下巻」「資料編」所収の記事に基き、「のじぎく文庫、但馬史1〜5」所収年表、その他を参考にし、日高町に関係ある沿革事項を収録した。内容の取捨選択、精粗繁簡等、決して完全ではないが、町史理解の一助とせられたい。

一、巻末に日高町全図を収録しておいたので参考にされたい。

日高町史下巻 目次

第一部 明治前期……………	1
第一章 王政復古と山陰鎮撫……………	3
第一節 王政復古……………	3
一喜一憂の住民たち 久美浜代官所明渡し前夜……………	3
第二節 山陰鎮撫……………	6
山陰鎮撫軍の久美浜、生野接收 鎮撫軍のわが町の通過……………	6
第三節 ええじゃないか乱舞……………	9
わが町に残る記録 山陰鎮撫の謀略工作 ある家の例……………	9
第四節 お達し書と官軍のイデオロギー……………	16
官軍の農村支配理念 慶応四年正月、達し書……………	16
第二章 版籍奉還と廃藩置県……………	20
第一節 久美浜県と生野県……………	20
県と藩の混在時代・三治同軌 版籍奉還 三丹執政会議 出石藩庁の江原移転計画……………	20
第二節 廃藩置県と豊岡県時代……………	32
廃藩置県 大豊岡県の成立 大区小区制……………	32

第三節	近代的戸籍の編成……………	37
	戸籍編成作業の進展	戸籍簿の表題の変化
	戸籍の内容の変遷	明治二年戸籍編成法
第四節	新兵庫島の成立……………	52
	豊岡県から兵庫県へ	地方三新法の公布と出石気多郡役所
		戸長役場の設置
第三章	治安警察と兵制整備……………	60
第一節	初期の警察……………	60
	治安の悪化と物騒な取締	高札制度の変貌
	警察制度の整備	警察の機動化
		警察電話
第二節	初期の兵制……………	68
	久美浜県の募兵と巡村兵隊	出石藩の兵制と巡ら隊
第三節	農民一揆の武力鎮圧……………	70
	出石藩兵の発火演習	生野焼打騒擾事件
	貢租減免の愁訴歎願の例	佐賀の乱の賊徒取締
第四節	国民皆兵徴兵制の実施……………	74
	徴兵制の施行	徴兵忌避の動き
		豊岡県庁の徴兵検査
		徴兵検査実施督励の通達
第五節	国家主義の高揚……………	80
	台湾事件と国旗掲揚	西南の役の従軍者

第四章	地租改正と地主制	84
第一節	地租改正事業	84
	地租改正の経過	
	地券の下付	
	土地の測量―地押丈量	
	等級表作成と地価の確定	
	山林原野の地租改正	
第二節	寄生地主制の展開	96
	小作地率と小作料率	
	小作契約の取りきめ	
	村内地主と村外地主	
第五章	農村経済と殖産興業	109
第一節	明治前期の村々の生活	109
	地誌編纂取調から	
	猪爪村	
	十戸村	
	栃本村	
	松岡村	
	山宮村	
	名色村	
	頃垣村	
	石井村	
	伊府村	
	大岡寺村	
	小河江村	
	八代村	
	中村	
	谷村	
	奈佐路村	
	藤井村	
	宵田村	
第二節	農牧業の消長	115
	米麦作	
	雑穀・特用作物	
	特産物	
	牧牛	
第三節	養蚕製糸業の近代化	119
	明治前期の養蚕業	
	明治前期の製糸業	
第四節	商工業の発展	124
	明治前期の商工業	
	山田商人の活躍	
	職人の労働賃銀	
第六章	治水防災と交通通信	130

第一節	道場堰と蓼川堰……………	130
	道場堰 蓼川堰 上郷村の掘抜訴訟……………	
第二節	治水対策の進展……………	145
	年申行事の大洪水 円山川流域の水害治水対策 三郡治水組合……………	
第三節	災害暦と防災対策……………	149
	災害暦 防災対策と窮民救助……………	
第四節	円山川の舟運……………	155
	船着場、いと、の変遷 川舟所有者の鑑札下附……………	
第五節	陸上輸送機関……………	159
	馬と牛と荷車 かご 人力車……………	
第六節	郵便事業のはじまり……………	163
	江原郵便局の開設 山田郵便取扱所誘致と山田商人 府中新郵便局の猛設置運動……………	
第七章	教育の進展と文明開化……………	167
第一節	初期の教育制度……………	167
	藩学、郷学、私塾、寺子屋 学制の施行……………	
第二節	小学校教育の発展……………	171
	日高地区 国府地区 八代地区 三方地区 清滝地区 西気地区……………	
	初期の小学校教育制度 鶴峰小学校新築の記録……………	

第三節 明治維新の宗教政策……………178

神仏分離と排仏毀釈 妙見宮の紛争と氏子改め キリスト教の解禁

第四節 自由民権運動の展開……………182

但馬の進歩性と保守性 天橋義塾と但馬の情勢 但馬における兵庫県会議員選挙

第五節 文明開化と農村生活……………191

風俗習慣の変化 博奕諸勝負に関する通達(久美浜県)

郡中立会規定(気多郡郡中立会) 村社祭日規定(気多郡栗山組)

第二部 明治後期……………197

第八章 地方自治制度の確立とむらの構造……………199

第一節 町村制の施行……………199

町村制の実施 第一回の日高村会と三方村会 清滝村の新設

第二節 府県制郡制の実施……………209

府県制郡制の成立 気多郡の廃止

第三節 立憲政治の進展……………212

第一回総選挙の実施 第二回総選挙の状況 第三回総選挙の形勢

明治三十一年度有権者名簿 清滝村七部落の選挙有権者数の推移

第四節 むらの構造……………230

勢力の弱かった零細商工業者 親方地主の主導する農村部

第九章	農業生産の発展	237
第一節	農業生産の変化	237
兵庫県下の傾向	米・麦の生産の増加	
特用作物	牛の飼育	
雑穀・豆類・いも類の生産の増加		
第二節	農業技術の改良	246
水稻栽培技術の進展	浅倉村の兵庫県種畜場	
地主会の役割		
第十章	鉄道の開通と電信電話	253
第一節	鉄道誘致運動	253
播但ルートと阪鶴ルート	山陰線建設計画と鉄道敷設法	
播但鉄道計画の進展		
気多郡の人々の鉄道誘致の考え方	出石郡の人々の鉄道誘致の考え方	
第二節	山陰線の開通と江原駅	265
山陰線の開通へ	江原工区の線路工事	
難航した江原駅の新設		
第三節	電信電話のはじまりと消防組	271
電信事務の開始	電話の開通	
消防組の発足	久斗村ポンプ使用規則	
公設消防組		
第十一章	金融機関の発達と産業の近代化	277
第一節	近代的銀行の発達	277
銀行制度の確立	日高町における近代的銀行	

第二節	産業の近代化……………	282
	養蚕業の発展 久斗縞の製造 郡是製糸の進出へ	
第十二章	日清日露の両戦役と銃後生活……………	288
第一節	出征兵士の苦闘……………	288
	但馬地方の連隊管区 戦争従軍犠牲者の増加Ⅱ三方村の場合	
	応召兵士の分析Ⅱ八代村の場合 応召兵士の分析Ⅱ国府村の場合	
第二節	銃後生活の犠牲……………	301
	日露戦争下の村民生活 成田中尉の日露戦役従軍日誌	
	城崎郡の尚武会 隆国寺の尽忠報国烈士之碑建立	
第十三章	教育と文化の普及発展……………	313
第一節	学校教育の普及……………	313
	教育の内容の確立 義務教育の普及 義務教育の就学率	
	実業教育の奨励 学校合併に伴う紛争	
第二節	社会教育の発展……………	327
	青年会の発足 教育会の活動 おくれて発足した婦人会	
第三節	衛生事情の改善……………	334
	江原病院の設立 日高町の開業医 町村衛生委員設置法の実施と伝染病	
	町村衛生組合の活動	

第四節 農村生活の向上と文化の諸相…………… 342

衣服・食料・住居 結婚と葬式 蓄音機 大神楽 民衆の文芸俳諧

短歌集、竹橋雜詠（嘯月逸人作）

第三部 大正期…………… 355

第十四章 農村問題の新局面…………… 357

第一節 郡町村制の消長と第一次世界大戦…………… 357

第一次世界大戦とわが町 財政の窮乏と郡制の廃止 町村自治の拡充と選挙権の拡大

第二節 米騒動から小作争議へ…………… 366

米穀検査の実施 米騒動わが町に波及せず 地主小作関係調整の進展

小作争議の無風地帯 おくれた耕地整理事業

第十五章 交通輸送機関の発達…………… 383

第一節 挫折した西気鉄道計画…………… 383

藤本俊郎村長の壮大な夢 但馬輕便鉄道建設計画の進捗 計画挫折の背景

但馬輕便鉄道の倒産

第二節 出石鉄道の開設運動…………… 395

執念の山田若桜線誘致運動 出石輕便鉄道建設の具体化

第三節 運送業の発展とバス事業…………… 402

運送業の発展 乗合馬車とバス事業 江原自動車とタクシー営業

第十六章	近代産業の開發と農村の近代化……………	407
第一節	蠟石山の開發と品川白煉瓦株式会社……………	407
	庄境村入会山蠟石山の開發 蠟石山利権をめぐる争奪抗争	
	品川白煉瓦株式会社の仮契約書 品川白煉瓦三方原料地の開業	
	蠟石山経営の変遷	
第二節	農村生活の近代化……………	420
	生活の改善の指標 電燈のはじまり、阿瀬川水力発電	
	苦勞した西氣、清滝地区の電燈事業 日高町上水道のはじまり	
	住民生活意識と住民組織Ⅱ戸主会・青年会・婦人会の役割	
第十七章	災害医療対策の改善強化……………	439
第一節	治水対策と北但大震災……………	439
	田山川の洪水の頻発 田山川第一期改修工事の推進 八代川治水改善への努力	
	北但大震災と日高町	
第二節	伝染病の流行と医療対策……………	449
	結核とトラホーム インフルエンザ 腸チフスその他の伝染病	
	寄生虫 郡立病院反対運動 日高村隔離病舎の新築	
第四部	昭和前期……………	455
第十八章	農村の窮乏と更生運動……………	457
第一節	農村経済の窮迫……………	457

農産物価格の暴落	米仙維持政策の進展	農家の窮乏の実態	
社会政策的農政の展開			465
第二節			
産業組合の発展	保証責任国府信用購買販売利用組合		
八代村信用購買販売組合	西気村購買販売組合	三方信用購買販売組合	
日高信用購買販売利用組合	清滝村信用購買組合		
兵庫県北部乾蘆販売購買利用組合	神鍋蔬菜出荷組合	自作農創設維持事業	
第三節			
農山村振興対策			481
農山村振興事業	負債整理と自力更生運動	ブラジル移民と満洲移民	
十戸の虹鱒養殖事業	十戸の山葵栽培	観光産業の誕生、神鍋スキー	
スキー民宿のうつりかわり			
第四節			
第一室戸台風の襲来			499
第一室戸台風の襲来	日高町の被害概況		
第十九章			
軍国主義体制の進展			505
第一節			
普選実施と地方政界			505
選挙権の拡大と政党分野	県議友田一郎	町長太田剛太郎	
防衛体制の強化		町議町長河本重利	
第二節			
消防組から警防団へ	水防組の新設	国家総動員法の成立	
大政翼賛新体制と末端組織	部落会町内会等整備要領	部落会と隣保の運営	
第三節			
軍国主義の教育制度			524

軍事教育の強化と国民学校	三方小学校教育方針	御真影奉安殿と忠魂碑の建立
青年学校の発足	戦時下の小学校と国民学校	
第四節	戦時体制下の宗教弾圧	531
	新宗教の誕生	打続く宗教弾圧
第五節	地方事務所の活動	535
	地方事務所の設置	北但地方事務所の活動
第二十章	戦局激化と戦時生活	539
第一節	戦局拡大と軍事動員	539
	満洲事変と郷土部隊出動	日中戦争から太平洋戦争へ
	日高防空監視哨と防空対策	婦人会の銃後活動
第二節	疎開と勤労働員	547
	工場疎開と神戸製鋼日高工場	志里池国民学校の学童疎開
	国民学校児童の動員作業日誌	男子の徴用と勤労働員
	女子勤労報国隊と女子学徒動員	
第三節	配給制度と耐乏生活	558
	衣料・食糧等の配給	各種物資の献納と供出
	米の配給	食糧増産と供出
		貯蓄の奨励
		軍用飯行李の生産
第四節	従軍軍人の苦闘	575
	戦没者名簿	従軍軍人のあしどりから

第五節 敗戦……………	583
戦争末期のすがた 敗戦を迎える	
第五部 昭和後期……………	591
第二十一章 戦後耐乏生活と民主化政策……………	593
第一節 戦後の耐乏生活……………	593
占領政策の実施 復員と海外からの引揚 インフレーションと食糧難	
戦後配給生活の実態	
第二節 地方政治の民主化……………	604
公職追放と地方制度の民主化 税制の改革 警察の民主化 消防の民主化	
第三節 農地改革と農業協同組合……………	613
第一次第二次農地改革 農地委員会の活動 農地改革実績	
農業協同組合活動の発展 農協活動の進展 農協の合併と沿革年表	
第二十二章 教育の民主化と社会福祉の振興……………	635
第一節 教育制度の改革……………	635
戦時教育体制の廃止 六三三制と男女共学 教育委員会制度の発足	
日高高校の誕生 東西中学校の統合	
第二節 社会教育の振興……………	643
日高町の公民館活動 三方村の社会学級活動 育友会の発足と教員組合の活動	

青年団の活躍 日高町青年団の結成 青年学級の発足 日高町婦人会の発足
日高演劇研究会の活躍

第三節

自然との闘い……………
ジェーン台風ほか 伊勢湾台風とその教訓 第二室戸台風

653

第四節

社会福祉の振興……………

日高病院 国民健康保険と国民年金 保育園 社会福祉協議会

日高町老人クラブ連合会 日高町献血友の会 火葬場

養護老人ホーム(ことぶき苑) 県立特別養護老人ホーム(たじま荘)

ごみ処理 公害対策

669

第二十三章

町村合併と新日高町の誕生……………

685

第一節

日高町ほか五カ村の合併……………

685

戦後における町村合併の促進 兵庫県の町村合併計画試案 六カ町村の合併への動き

新町建設の基本方針と合併条件 兵庫県会議決と総理府告示

第二節

日高町と浅倉・赤崎区の合併……………

697

合併の経過 合併の意義

第三節

国府地区の分町問題……………

699

分町問題起る 賛成側と反対側の主張点 北部分町側の実力行使闘争

上佐野部落豊岡市へ合併

円満解決へ

第四節	新日高町の行政機構……………	717
	日高町の行政機構 新庁舎施設の建設整備	
第二十四章	高度成長下の日高町の現状……………	725
第一節	農業構造の変化……………	725
	農業の兼業化と機械化 圃場整備事業の進展 水田利用再編対策の強化	
	畜産の団地化 養蚕製糸業の衰退 町営造林と林道建設	
第二節	商工業の発展と観光産業……………	742
	商工業の発展 商工会の活動 石井・岩中発電所の建設	
	国定公園と自然公園の指定 スキートの復活と神鍋スキー協会の結成	
	国体開催ほか各種スキー大会の実施 リフトの建設とスキー場の増設	
	観光産業の発展と日高町観光協会	
第三節	上水道の近代化と道路の整備……………	767
	上水道の整備拡張 上水道の近代化と簡易水道 県道姫豊線の国道三二二号線昇格	
	県道出石・村岡線ほかの整備 町道の舗装化 山陰線国府駅開設	
第四節	学校教育の整備充実……………	777
	学校施設の整備・充実 学校教育の現況 地域に根ざす教育	
	指定研究の発表 部活動各種表彰 校訓 学校給食制度の普及	
第五節	社会教育の充実発展……………	783
	生涯教育の実施 公民館の活動 文化財保護の進展 青少年教育	

日高町文化協会 社会体育と体育協会 ボーイスカウト

第六節

高度経済成長と生活文化水準の向上……………794

生活文化水準の飛躍的向上 町章、町歌、町花・木・鳥

第六部 資料

一、人物

河本濱二郎 谷垣平一郎 中島梅岳 北村徐雲 北村秀一 長沢 忠……………801

長沢 一夫 田尻 昌次 友田二郎 小林篤一 谷垣長蔵 西岡時雄

井東 勇 瀬崎 晴夫 植村直巳……………799

二、戦没者名簿

明治以降各戦役地区別戦没者数 西南の役 日清戦争 日露戦争……………815

第一次世界大戦以降満州事変(大正三年～昭和十一年)

日中戦争以降(昭和十二年～昭和十六年) 太平洋戦争以降(昭和十六年～)

三、歴代町村長と議長

合併迄の歴代町村長 合併迄の歴代町村会議長……………881

四、日高町所在神社一覧

……………887

五、日高町所在寺院一覧

……………909

六、年表

……………928

七、日高町内大字小字一覧(昭和三十年)

……………969

八、気多郡内学区編成一覧(明治七年)

……………980

あとがき	983
編集を終えて	989
写真・表・図一覧	

○本巻背文字、扉文字は前町長森垣壮氏の筆による。
 ○見返しに使用した文書は正倉院保存文書「正税帳」の一文を宮内庁書陵部の許可を得て掲載した。「正税帳」については資料編で解説されている。